

発問で育てる人間性（2）

—小学校音楽科における発問例を中心に—

福島 さやか・宮脇 博巳*

Humanity Nurtured through Questioning (2)

—Focusing on Examples of Questions in Elementary School Music Studies—

Sayaka FUKUSHIMA and Hiromi MIYAWAKI

概 要

筆者らは拙著「発問で育てる人間性」¹⁾において、コロナ禍におけるオンライン授業等の新しい環境下での教師と児童の基本的な学習方法を検討するために、小学校、大学、職業専門学校の教員を対象としてアンケート調査を行い、発問の重要性を改めて確認した。また、人間性という視点に基づいた初等音楽科教育と初等理科教育に関連する発問（問答）例を提示した。本稿では、小学校音楽科低学年及び中学年の発問（問答）例を示して検討を進めた。

キーワード：発達教育学、発問、人間性、オンライン授業、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）、STEAM 教育、発想力向上

I はじめに

2020年3月、新型コロナウイルス感染症（COVID）パンデミックが宣言された。このパンデミックは、多方面で人々の日常生活を変えてきた。教育現場においても、さまざまな対応の1つとして、オンライン授業の導入が行われた。

初等音楽科教育においても、さまざまな実践が重ねられてきた。『季刊音楽鑑賞教育』（2021年4月）では、【実践】コロナ禍から見えてきた音楽の授業①²⁾において、福岡亨子氏の『コロナ後の世界をつくっていく子どもたちを育むために』の実践が示されている。コロナ禍の不安の中で様々な音楽が注目されたことを受け、小学生なりにそれらの音楽が多くの人たちの心を捉えていることの意味を感じてほしいとの願いから、題材「今の状況下で聴いてほしい音楽」を設定し、休校期間中の家庭学習に配慮されていた。一斉登校になった後、『花は咲く』（岩井俊二作詩・菅野よう子作曲）の練習が始まり、歌詞を味わった子どもから「今は悲しいけれど、その先に良いことが待っているような希望を感じる」「一人ぼっちではない繋がりを感じる」のような深い読み取りが確認できたことが記されている。

また『教育音楽・小学版』（2022年4月）では、授業レポート：「With コロナ」で見出す音楽授業の本質³⁾

のなかで、高倉弘光氏の『あえて「いつも通り」のオンライン授業』が示されている。授業はオンライン授業に慣れた様子の子どもの様子から始まっている。《ゆかいな時計》の鑑賞の授業であるが、授業冒頭では、曲名は示されないまま、教科書も開かないまま進む。全員を一斉に見渡せるギャラリービューで先生は、ある子どもが口を動かしていることに気が付いて「なんて言おうとしたの?」と呼びかけ、子どもはこの曲の特徴的な音を、口を鳴らしてまねてみせたことが記されている。

福岡氏の実践では、音楽が心に働きかけることも重視した。休校期間に学んだ内容が、一斉登校後の授業につながっている様子が確認できる。福岡氏は、コロナ以前から行ってきた音楽の授業の価値を丁寧に見直した。さらに深めることの必要性について述べている。また、高倉氏の実践では、普段の音楽室での授業と同様の発問や板書などで進められている。そして、子どもたちと教員の対話が重視されている。福岡氏と高倉氏の実践では、豊かな教材解釈とともに普段の子どもたちの生活や学びを深くとらえたうえでの実践が重ねられている。

田中（2023）⁴⁾は、講話「うた（音楽）の力ー音楽科の存在意義ー」のなかで、芸術教育（音楽）の存在意義について、ハーバード大学R. コーガン教授（現代音楽の第一人者）の言葉「(略) 科学研究はロジカルなパールの世界ととらえられがちだが、科学研究は芸術と同

*佐賀市久保田児童センター所長、福岡女学院大学非常勤講師、佐賀大学名誉教授

じノンバーバルな直観の世界、科学研究に必要な直観力を芸術は支える（2021年7月講演）」を示し、アートがサイエンスを育むことを示している。ここでは、STEAM（米国で始まった Science、Technology、Engineering、Mathematics に Art を加えて学習することで芸術の心を融合させようとする活動）化だからこそ芸術教育が重要になることを指摘している。

「Society5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会（平成30年6月5日）」⁵⁾では、「Society5.0において我々が経験する変化は、これまでの延長線上にない劇的な変化であろうが、その中で人間らしく豊かに生きていくために必要な力は、これまで誰も見たことのない特殊な能力では決していない」と断言した。「むしろ、どのような時代の変化を迎えるとしても、知識・技能、思考力・判断力・表現力をベースとして、言語や文化、時間や場所を超えながらも自己の主体性を軸にした学びにむかう一人一人の能力や人間性が問われることになる。」として人間性の重要性が示されている。

本稿では、発問、人間性、発達と教育の関係について述べた後、小学校音楽科教育低・中学年の発問（問答）例を示し、検討を進める。

Ⅱ 発問について

大田（1988）⁶⁾は、「発問」について「授業において、教師が子どもたちにいろいろ問いかけることを一般に発問という。・・・子どもたちの実態と教育内容・教材の双方についての深い理解が求められる。主発問は、1時間の授業についてだけではなく、単元の全体をとおして系統的に考えられる必要がある。」と述べている。

また豊田（1990）⁷⁾は、「発問」について「授業中になされる教師の問いかけである。・・・発問が子どもに思考と発見を迫る機能をもつには、発問によって「おかしい」「なぜ」「どうして」という疑問を子どもたちの中に生じさせる必要がある。・・・①どうしたら子どもたちの思考をこの教材の問うべきものに向かってよび起こし、限定し、方向づけていくことができるか、②しかも今日の教師の発問が明日には子ども自身の問いになるようにするにはどうすればよいか、を自覚して発問を構想する必要がある。」と述べている。

Ⅲ 人間性について

「人間性」について、清水（1967）⁸⁾は、「・・・純粋化された人間性が曖昧かつ無力であるところから、その後天的形成としての教育が必然的に要求され、また曖昧かつ無力というのが可塑性にほかならないところから、教育の可能性が成立する。」と述べている。

また松井（1990）⁹⁾は、現代は人間性の概念がかつてなく多義となっていることを指摘している。そして「常に歴史を視野に入れ、それぞれの思想のなかでのとらえ

方を見きわめる必要がある。」と述べている。教育における人間性について、見きわめながら検討を進める必要がある。

Ⅳ 発達と教育の関係について

大田（1988）は「発達と教育の関係」について¹⁰⁾、教育は、人のちがいをこえて人を結びつける文化を子どもたちに教える仕事を含んでいることを述べている。また目的意識的選択の力量を鍛えるためには、問いに対して答えを出すまでの分別に着目して、評価し励ましていくことが、教育という仕事の核心にある過程であると述べており、問いと答えのプロセスの重要性を説いている。

Ⅴ 発問（問答）例

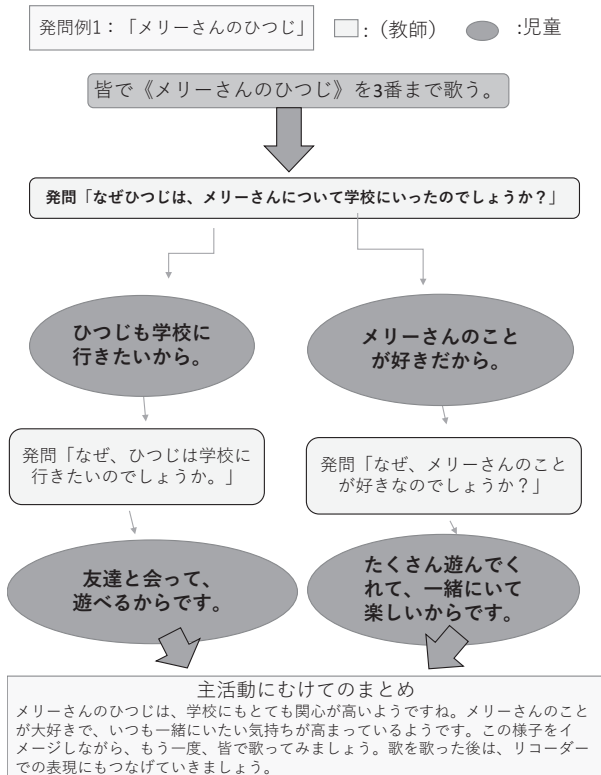
ここでは初等音楽科教育における、歌唱と音楽づくりに関連する発問（問答）例を示す。発問①に対する子どもたちの言葉に反応して、教師がどのように発問②を行うか。さらに子どもたちは、その発問②に対して、どのように答えていくかを示している。

1 メリーさんのひつじ〔3年生〕

《メリーさんのひつじ》は、令和6年度の教育芸術社3年生の音楽教科書に、新規で掲載される予定である¹¹⁾。これまでも、日本の音楽教科書に掲載されてきた歌曲である¹²⁾。また高等学校の音楽教科書において、音楽の諸要素を学ぶ際にも提示されている曲である¹³⁾。そして就学前に歌われることも多いと考えられる歌曲であり¹⁴⁾、さまざまなところで親しまれている。

本稿では、歌唱を行った後リコーダー演奏で《メリーさんのひつじ》を表現することを考えて、発問例を提示している。歌詞については、3番までの歌詞を提示する。さまざまな解釈等がある。ここでは、ウィル・モーゼスの絵本『Mary and Her Little Lamb』¹⁵⁾について取り上げる。この絵本は、本当に起った話をもとに描かれている。ある朝メリーと父親がひつじ小屋を見てみると、2匹の子ひつじが生まれていた。子ひつじの1匹が弱っており、メリーが看病して、元気になる様子が描かれている。その後夏には、メリーと子ひつじが花をつんで輪飾りをつくって遊ぶ様子や、お茶会を楽しんだ様子が描かれている。また、メリーの友達は遠くに住んでおり、子ひつじが一番の親友だったことが記されている。そのため、学校に行く年齢になったメリーが学校に行く際に、子ひつじがぴたりとついてきたことが分かる。

授業のなかで、子どもたちのなかには自分の家で飼っている犬と自分との関係と重ねて考える子どももいることが予想される。絵本のなかでは、アメリカの文化に触れる箇所が含まれる。歌曲のイメージをより広げた後に楽曲の演奏に移行することで、子どもたちの演奏時の表現がより豊かなものになると考えられる。



2 身の回りの音（風鈴）〔2年生〕

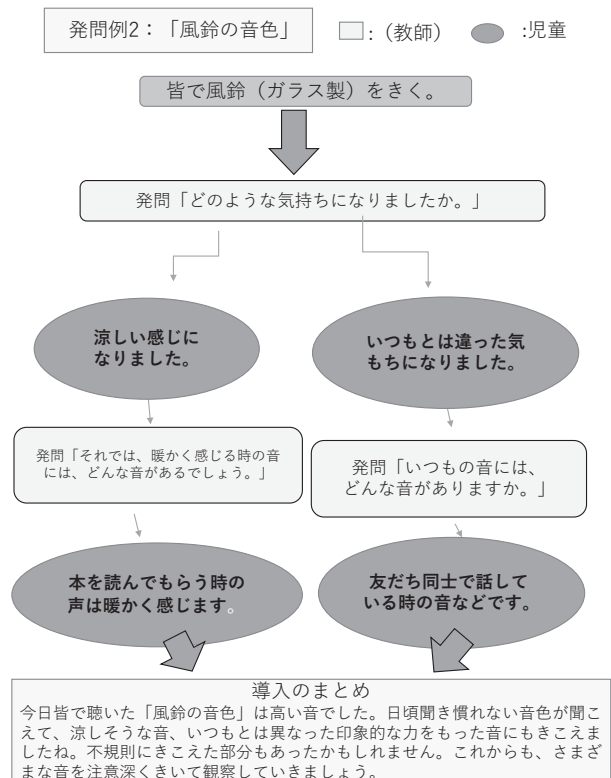
音楽づくりに関連して、音の素材について学ぶ際の導入部分の発問を示している。

風鈴は、さまざまな種類のものが存在し、音色もさまざまである。陶器製のものや、金属製のものもある。形を見比べたり音色を聴き比べてみることで、子どもたちは、いろいろな気づきを得る可能性がある。風鈴は、楽器の1つでもある。『楽器』¹⁶⁾では、ビルマの金属製の風鈴と韓国の金属製の風鈴（ロンドン、ホーニマン博物館蔵）が提示されている。ホルンボステル＝ザックス分類法では、体鳴楽器である。体鳴楽器の音の発生について、①叩きつける、②踏む、③振る、④打つ、⑤打ち合わせる、⑥こする、⑦ひっかく、⑧はじく、の8つの音を出す方法がある。「打つ」体鳴楽器が最も多い。風鈴も「打つ」に分類されている。また、形状は（a）棒、（b）鐘、（c）ゴング、（d）鉢、（e）木琴のような板片状のものなどである。素材や音の出し方そして形状が出る音に大きな影響を与える。先に述べた8つの音を発する方法については、手作り楽器をつくる際の考え方にもつながっていく。

絵本『音楽ばんざい！』¹⁷⁾では、ホルンボステル＝ザックス分類やさまざまな楽器が描かれており、どここの国の楽器であるかも併記されている。音楽の世界の広さやリズムやメロディーはどのような意味をもつかといった内容からこの絵本は、始まっている。このような絵本などの紹介などを通して、子どもたちとともに、音楽の広さを考えていくことも考えられる。

風鈴の音については、「風鈴の音がピーという（単）音だったとしたら少しも涼しいとは感じない。いくつかの周波数の音が振動しながら重なりあったところに、私たちの耳は反応するのです。規則的でない、ちょっとくずれたところに涼しさを感じている」¹⁸⁾という分析もある。それぞれの音がもつ意味などについて想像し、深く考えていく必要がある。

風鈴を提示する際に、目を閉じるなどして風鈴の音のみをきく場合は、目を開けて風鈴を見てきた場合と、「異なる音」と感じる子どももいることが考えられる。また、実際には同じ風鈴であるため、「同じ音」と感じる子どももいると予想される。風鈴の鳴らし方によっては、ベルの音と同じように感じる子どもがいることも考えられる。ガラス製の風鈴には、絵が描かれているものがある。例えば、ひまわりの絵が描いてある場合には、ひまわりの匂いがする、風の音がするなど感じたことを発表する子どもがいることも予想される。陶器製の風鈴とガラス製の風鈴を実際に手で触れて違いを探索活動を行う際には、子どもたちが形状の違いに気付くことも考えられる。素材の異なる風鈴を提示した際には、音の高さの違いに気付く子どもがいることも予想される。風鈴の提示方法によっても、さまざまな回答パターンが考えられる。同じ時間に同じ場所で、同じ方法できく音について、子どもたちの答えにもさまざまな内容が現れることが考えられる。音の面白さ、音を感じる楽しさ等をクラスで共有し、音をつくりだすこと、音楽をつくる活動へとつながっていくことが考えられる。



Ⅵ 総括

《メリーさんのひつじ》は、令和6年度の音楽教科書のなかでアメリカ民謡として提示される。多くの人々に長く歌いつがれ、生活感情、地域性を反映している。このような楽曲のもつ特性も感じながら学び、音楽の諸要素の学びへとつなげていくことも重要と考える。

歌唱に関して就学前に、歌を歌ったりする楽しさを味わい¹⁹⁾、初等教育段階では、どのように歌うかについて思いや意図をもって表現することなどの学びを深めていく。中等教育段階では、曲種に応じた発声を学ぶ²⁰⁾ ことにつながっていく。そして高等学校では曲想と音楽の構造や歌詞、文化的・歴史的背景との関わりを理解が深まっていく²¹⁾。ここでは、自分自身で捉えていく過程も重要となる。このように学びが広がり、深まっていく。

「残したい日本の音風景100選」²²⁾ において、三沢駅の南部風鈴〔岩手県奥州市 音風景の種類：生活その他〕が示されている。駅のアナウンスや電車の動く音とともに、風鈴の音が鳴っている。ここでは風鈴の音は大切に残していきたい日本の音と考えられている。また日本の文化にも関連すると考えられる。

『幼保連携型認定こども園・教育・保育要領解説（平成30年3月）』²³⁾ では、感性と表現に関する領域「表現」〔内容〕のなかで、(5)さまざまな素材に親しみ工夫して遊ぶことが示されている。また、素材に関わる多様な経験は、表現の幅を広げて、表現する意欲や想像力を育てる上で重要であると記されている。

初等教育における生活や社会のなかの音や音楽に関わる内容が、中等教育においても大切にされる。また適宜、自然音や環境音などについても取扱い、音環境への関心を高めることができるよう工夫することも重要である。このことは、人間にとっての音や音楽の存在意義を考えることにつながる²⁴⁾。

『高等学校学習指導要領解説 芸術編 音楽編 美術編』²⁵⁾ では創作に関連して、音素材について人の声、楽器の音に続いて、自然界や日常生活に存在する音について示されている。風、雨、川のせせらぎ、小鳥の声、虫の音、機械の動く音などの自然音や環境音と、その特質や雰囲気との関わりを理解することが示されている。

上記のように就学前の多様な豊かな経験が、初等教育段階での音楽表現へとつながり、中等学校、高等学校での学びへとさらに発展していくことが期待されている。

Ⅶ おわりに

本稿では、拙著「発問で育てる人間性」に引き続き、小学校音楽科における発問（問答）例を示し、検討を進めた。発問①に対する子どもたちの言葉に反応して、教師がどのように発問②を行うか。さらに子どもたちは、その発問②に対して、どのように答えていくかを示した。今回は発問例1と2において2つの発問パターンを

示した。多くのパターンをあらかじめ検討しておくことは、子どもたちとのより豊かな対話に発展することが考えられる。地域、子どもたちの生活、既習事項の内容等によっても発問は変化する。教育現場で実践する際により具体的な展開について検討を深めるなどして、今後も発問例開発を試みたい。

注

- 1) 福島さやか・宮脇博巳（2023）「発問で育てる人間性」『福岡女学院大学大学院紀要【発達教育学】』第11号、2023、pp.17-21.
- 2) 『季刊 音楽鑑賞教育』（2021）Vol.45、音楽鑑賞振興財団、pp.12-15.
- 3) 『教育音楽 小学版』（2022）、音楽之友社、pp.11-14.
- 4) 田中健次（2023）第27回ミュージックテクノロジー教育セミナー in 九州 於九州女子大学全体講話「うた（音楽）の力－音楽科の存在意義－」6月18日 配布資料 p.5
令和元年6月10日 教育課程部会 第110回では、「Society 5.0時代を見据えた芸術教育の在り方について」などが議題として挙げられて議論された。配布資料13-2 「芸術の力」を考えるにおいて田中健次氏の同様の資料が示されている。
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/1418183.htm（2024年2月10日閲覧）
- 5) https://www.mext.go.jp/a_menu/society/index.htm（2024年2月10日閲覧）「Society 5.0に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」(本文) p.7.
- 6) 大田邦郎（1988）「発問」『現代教育学事典』労働旬報社、p.627.
- 7) 豊田久亀（1990）「発問」『新教育学大事典 ターハ』第5巻、第一法規出版、p.512.
- 8) 清水幾太郎（1967）「人間性」日本教育社会学会編『教育社会学辞典』東洋館出版社、pp.838-839.
- 9) 松井春満（1990）「人間性」『新教育学大事典 ターハ』第5巻、第一法規出版、p.438.
- 10) 大田堯（1988）「発達とは何か」『現代教育学辞典』労働旬報社、p.622-p.625
- 11) 教育芸術社 新規掲載曲のご紹介
<https://www.kyogei.co.jp/textbook/es/es-r6/listen>（2024年2月6日閲覧）
- 12) 『歌い継がれる名曲案内 音楽教科書掲載作品10000』日本アソシエイツ、2011年、p.213、p.233、p.384、p.651、p.658
歌詞は、高田三九三氏、北村文夫氏、久野静夫氏、美龍明子氏、別府太郎氏の歌詞が掲載されている。
- 13) 『高校音楽Ⅰ 改訂版 Music View』教育出版、2017年、p.21. ここでは、リズムを変えて3拍子にする、調を変えてハ長調からト長調やハ短調に変更して、音楽の諸要素のはたらきや効果を調べるが示されている。
- 14) 小林美実編『こどものうた200』チャイルド本社、2007、p.136. など。
- 15) ウィル・モーゼスさく こうのす ゆきこやく『めりーさんのひつじ ほんとうにあった おはなし』福音館書店、2015.
- 16) 皆川達夫監修『楽器』マール社、2007、pp.90-91、p.101.

- 17) レ・シャ・ブレ作、石津ちひろ訳『音楽ばんざい！』ほるぷ出版、2005.
- 18) 『NHK 美の壺 風鈴』NHK 出版、2008、p.30 東京工業大学名誉教授 武者利光氏の分析。
- 19) 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園・教育・保育要領解説』平成30年3月、p.294.
- 20) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説 音楽編』、教育芸術社、p.40.
- 21) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 芸術（音楽 美術 工芸 書道）編 音楽編 美術編』平成30年7月 https://www.mext.go.jp/content/1407073_08_2.pdf（2024年2月12日閲覧）p.30.
- 22) INCE-Japan「環境省選定 日本の音100選 サウンドライブラリ」<https://www.ince-j.or.jp/sound>（2024年2月12日閲覧）平成8年に選定されている。
- 23) 19) に同じ
- 24) 20) に同じ、p.99.
- 25) 21) に同じ、pp.41-42.

謝辞

本稿の発問例を作成するにあたり、ご協力をいただきました皆様に心より感謝申し上げます。